
僕とおかんと狂気の父 ？

クレイジーダディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とおかんと狂氣の父

1

【Zコード】

Z5307BA

【作者名】

クレイジーダディ

【あらすじ】

前回までのあらすじ

やあ、僕はダイキ。

十五歳の誕生日に父がくれたのは、母を取り込んで完成した超汎用人型兵器、オカンゲリオン。

ええっ、これに乗れってどういう事よ？おまけに、敵はデブルガンドムに取り込まれた兄ちゃん？

兄ちゃんを引きこもり部屋から引きずり出すその日まで、俺の戦

いは終わらないっ！

さあ、我が家家の平和を取り戻すその日まで、戦うんだ、俺！

今日は学園モノか？の巻

「何やつてんですか！」

俺は父が掲げているプラカードを奪い取り、叩き折った。

「完璧に俺のキャラが崩壊してるじゃないですか。大体、誰に向けての文章なんですか、これ？」

「ううう、前回を読んでないドクシャさまに？」

「わけの解らないメタはやめて下さいよ！」

俺に一喝されて、父はオカングリオンの巨大な足元にすがりついた。

「母さん、ダイキがいじめるよう……」

（まあ、あの子も反抗期ですからねえ。）

改めて自己紹介しよう。俺はダイキ、『ぐく普通の十五歳だ。

ちょっと父がクレイジーだったり、ちょっと母が規格外のデカさだったり、兄の引きこもり部屋がMSだったりする以外は、『ぐく普通の家庭で育つた、『ぐく普通の中学生だ。

「自分だつてメタ……」

「残念でした」、カツコに入れなければメタ『発言』じゃないんですね。」

（まあ、まあ、喧嘩しないで。）

オカングリオンは大きな指で俺をつまみ上げた。

（ほらほら、遅刻しちゃうわよ。）

母は俺の口にトーストを突っ込んだ。

「あー、いいな。母さん、わしもー。」

（もう、父さんつたら、甘えんぼ？）

バカッフル漫才に付き合っている余裕はない。

俺はカバンをひとつつかむと、表へ飛び出した。

早足で歩く通学路には、すでに制服を着た学生の姿は無い。やばい。あと五分早く起きるべきだった。

近道をしようと通学路を外れ、公園を横切ろうとした俺は、滑り台の上に学ランを着た人物を見つけてしまった。

あちやー、面倒なことに……

「おーい、ダイキ、早くしないと遅刻するよ?」

レポート用紙の束を抱えて、人懐っこく手を振っている彼は幼稚園からの幼馴染だ。知らん顔するわけにもいかない。

「ユウトー!お前だつて遅刻するだる。こんなとこひで何やつてんだよ。」

「んー、宇宙の収縮率から見たこの公園の消滅点を計算したくなっちゃつてね。」

超がつくほど天才児である彼の言つ事は、俺には全く理解不能だ。

「それはまた今度にして、学校に行こう?」

「いいよ。ちよつと最期の証明も終わつたところだしね。」

俺はユウトを引きずるようにして走り出した。

何とか遅刻だけは免れた。急いでユウトの机の上を整えてやる。

「一時間目は国語だぞ。お前、国語の教科書は?」

「ああ、国語。そつか、国語ね。」

頼むから、そう言えればそんな教科もありましたね、みたいな顔しないでくれよ。それでなくとも、あの先生に目をつけられてるんだからさ、お前は。

「別に、日本語なんか解らなくとも、日常生活に困らないしね。」

ほう、今お前が話している、それが何語か言つてみろ!

そうしている間にも、始業の時間は迫つてくる。俺はガコンと机をひつ付け、俺の教科書を真ん中に広げた。

「なんだ、また教科書を忘れたのか。」

嫌みの好きな国語教師は、教室に入つてすぐに、ユウトに目を付

けた。

「違うんですよ、先生。忘れたのは僕の方で……」

「クズがクズをかばうから、こいつがますますグズになるんだぞ。」

『『うまい事言つただろ?』』と言いたげな視線に、クラスのあちこちでお義理の笑い声が上がつた。俺もお義理と愛想を込めてヘラリと笑う。

「コウトだけは違つた。すつぐと立ち上がり、

「先生、僕の友人を愚弄しましたね?」

「あ? 愚弄もするさ。先生は苦労しているからな。お前、この前の

テストも白紙で出しただろ?」

「それは、正解がなかつたからです。」

「正解がない? そんな訳がないだろ?」

次の文章を読んで、選択肢の中から作者の気持ちに最も近いものを選びなさい。

ア 戦争の愚かさといつものは文筆に表しきれないものである。

イ 戦争による損失は物的なものだけではない。

ウ 私をここまで育ててくれたのは皮肉にも戦争体験であるさあ、正解はどれでしよう? それとも天才君は『消去法』とかつて知らないのかなあ。』

「ふん、愚直な。この作問者は、作者にインタビューでもしたんですね? それとも、作者が直々に問題を作つてくれたとか?」

「へ理屈はいらない! 正解はどれかと聞いていいんだ。」

「正解……正解が聞きたいんですけど。」

コウトの瞳が怪しく光るのを、俺は見逃さなかつた。やばい! コウトのやつ、アレをやる気だ……。

「教えてあげますよ、正解を。そして、お前の人生の間違いを……」

「ちょっと待つたターックル!」

俺は先生に詰め寄るうとするコウトを思いつき突き飛ばした。

「先生! 今ので、俺もこいつも怪我をしました。保健室へ行つてき

ます！「

俺はコウトを引きずるようこじて教室を飛び出した。

今回は学園モノか？の巻（後書き）

あとがきドラマ
兄ちゃんの就職

あーあ、この引きこもり部屋から出るなんて、考えたくもない。
オレは求人誌のページをめくつた。
ん？自家用車での出勤可？デブルガンダムは自家用車に入るのか？

女教師も出してみました！の巻

「あんな奴、洗脳してやればよかつたのよ！そんで、あんなことやこんなことさせちゃつたりして……」

当校の美人保健医、楓先生は大口を開けて笑い飛ばした。

「見たかつたな～、ユウト君の、他人を洗脳する程度の能力。」

「いや、こいつの洗脳はマジしゃれにならないですから。」

当のユウトはといふと、ベッドの上にレポート用紙をぶちまけて何かを計算している。

「今日は何を計算しているのかな？天才君は。」

数少ないユウトの理解者である楓先生。彼女にはユウトも安心しきつた笑顔を見せる。

「タイムマシンのもととなる、時間軸の簡単な計算ですよ。」

「面白そつね。でも、学校からのお知らせをメモ代わりにしちゃダメよ。」

レポート用紙にまぎれていたそのプリントを、彼女はつまみあげた。

「明日の授業参観のお知らせね。お家の人に見せなかつたの？」

「ええ、どうせ、誰も来てくれませんから。」

それだけ言い放つと、ユウトは再び計算に没頭し始めた。

俺は楓先生を保健室の外まで連れ出した。

「あいつには『優等生』のアーチギがいましてね。両親とも、扱いにくい『天才』よりも、どつちかって言つと……ねえ。」

「もしかして、ユウト君のことは放つて置きっぱなし！？あんなに美味しそ……才能あふれる口なのに！」

俺は保健室の中をのぞき見た。両親からは厄介者扱いされ、友だちからは変人扱いされ、先生からは敵視される。それでも、ただひたすら数式をつづり続けるユウトは、寂しくは無いんだろうか。

「『天才』って、そんなにいけない事なんですかね？」

俺は我が家のお気楽な『天才』の事を思い浮かべていた。あいつに頭を下げるのはしゃくだが、仕方がない。俺の計画には、どうしてもありつが必要だ。

家に帰った俺は、父の前に頭を下げた。

「ロボットを一体作つてください。」

「えー、何用？全長は何十メートル欲しい？」

「そんなでかいサイズじゃなくて、普通の人間ぐらいの……ユウト

の母親そつくりにお願いしたいんだけど。」

「そんな小さいのは専門外なんだがなあ。」

父は不服そうに、それでもラボに向かった。が、すぐに戻つて来て、

「じゃあさ、せめて十万馬力にしてもいい？」

「お願いだから、普通の人間っぽく作つてください。首が取れるとか、パートカーを見ると破壊衝動にかられるなんてのも、やめて下さいよ。」

「それじゃ、まるきり普通じゃん。」

父は本当に不服そうだった。

女教師も出してみましたーの巻（後書き）

あとがきドラマ
兄ちゃんの就職

俺はとうあえず、ある会社の面接を受けることにした。
意地の悪そうな面接官が、デブルガンダムをじろりとじろりんだ。
「ずい分と変わった格好ですね。面接にはスーツだと書いたのに常識は無
いんですか？」
「はい、だからモビル『スーツ』です。」
「ふうん？」
何だかこいつ、嫌いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5307ba/>

僕とおかんと狂気の父？

2012年1月14日21時46分発行